

耐性あるコミュニティづくりのためのリーダーシップ

日時：8月21日（水）9：00～12：00

講師：Dan vizzini

Judy Parker：City of Portland

Robert Liberty：Director, Urban Sustainability Accelerator

Susan Anderson：Director, Bureau of Planning and Sustainability

Brian Hoop：Office of Neighborhood Involvement (ONI)

Bob Kellett：Neighborhood Planning Program Manager

Chips Janger：Urban Green

文責：愛知県豊明市 松本小牧

《議場の案内・議会のしくみについての説明》

Judy Parker：City of Portland

ポートランド コミュニティがしっかりしているし、そういう活動の手助けをしたいと考えて移り住んでくる人が多い。道路がきれいだったり、環境にやさしい産業技術がさかんであったり、路上でたくさんのアクティビティがあったりするまちであるが、これらは偶然ではなく、意図的にそういうまちをつくりたいという思いがあって作られたものであると考えている。ポートランドには公選の5人の議員。一人が市長、4人がコミッショナー。彼らは別々の部局を割り当てられている。市長には予算提案権とコミッショナーをどの部局にするか任命する権限が与えられているが、そのほかはすべて同じである。市民の意見を聞きながら、5人のうち3人が合意をしないと物事が決められないというしくみ。市長直轄の部局は、都市計画及びサステナビリティと市民参加の部局である。

《パネルディスカッション》

① Robert Liberty：Director, Urban Sustainability Accelerator

30年くらい、地域レベルで開発と保全をどう両立させながら都市計画をすすめるかということに携わってきた。4つの違うかたちでこの問題にかかわっていた。一つはNGOの弁護士として、広域政府の議員として、民間のコンサルタントとして、今現在は大学で教えています。

人口の減少により、地球上でいつまでも資源を得ようとするのはもはや不可能であり、資源を保持しようとする人たちとの意見の食い違いも生じてきている。耐性のあるコミュニティを作っていくというのは、計画でもテクノロジーでもなく、みなさんがどういう姿勢でこの問題に向かうかということであるとか、コミュニティそのものが解決をしていく

ということが重要になってくる。この問題は社会全体で抱えているものであるが、みなさんが持っているこの問題に対する責任感をどう全体で共有しながら前にすすんでいくかということが課題になっている。

② Susan Anderson : Director, Bureau of Planning and Sustainability

都市計画やゾーニング、サステナビリティなどを担当する部局のディレクターをしている。自分が学校にいたときは、経済学と環境学を同時に勉強したが、今では普通のことかもしれないが、当時は非常にユニークだと思われていた。耐性をつけるためには、多くの選択肢を持つこと、多くの機会を活用すること、物事がどういうふうに進むのかということ予測しながら対応することであると考える。



③ Brian Hoop : Office of Neighborhood Involvement (ONI)

市民にいかに情報を提供し、いかに政治や行政に参加してもらうかということをしてしている。ポートランドで特徴的なのは、コミュニティがやりたいことに取り組めるよう、市役所からコミュニティにツールや資源を提供していき、コミュニティがいかに地域をよりよくしていくかという支援をしていることである。また、マイノリティがいかに参加していくかということについても資金を提供している。

もう一つのテーマは、いかにコラレーションをしていくか、マイノリティが連合を結成していかに政治的問題に対応できるかということに対してサポートしていくなどして、いかに多様性が反映された市政になるようにしていくかということである。今後は、資源が少なくなっていくなかで、いかに市民と対等なパートナーシップを築き、市民の力を活用していくかということが重要になってくる。

④ Bob Kellett : Neighborhood Planning Program Manager

市内には7つのコアリション（連合）があり、サウスイーストには20のネイバーフットを管轄している。今は、社会の変化のペースが速くなっており、これらにどう対応していくかということを考えていかなければいけない。その一つとしては、行政としてその問

題にどう対応するかということもあるが、何が来るかということ予測しながら対応していく必要がある。しかし行政だけで解決できる問題ではない。やはり耐性強いコミュニティづくりというのはコミュニティの人たちの力でできることだと思う。そのためには、その人材をどう育成するか、人材にどういったリソースを提供するかということだと思う。

⑤ Chips Janger : Urban Green

これからますますローカルな問題が重要になってくる。小さな団体が変化をもたらしていくためには、多くのステークホルダーを集めて、パートナーシップを築いていくことが重要である。それにより問題により効果的に、より早く対応できる。それで自分はアーバングリーンにおいて、どうやって人と一緒に仕事をするのか、どうしたら目標を共有できるのかということについて取り組んでいる。

ー全体ディスカッション

Q. ポートランドは人口が増加している発展しつつあるまちという印象を受けた。日本の大半は高齢化で人口減少しているまちである。ポートランドの課題は何か。

A ポートランドは人口増加しているまちであるが、将来的にどういうニーズが出てくるかということ把握しておくことが大事だと考えている。高齢者の数が増えていると同時に、若者の人口も増えており、真ん中の層が非常に少ないという現状ある。また、ポートランドの小学校の子供の半数が、マイノリティの人種となっており、多様な人種の市民に対するサービスの提供という視点が必要となってきた。また、健康に年をとること重要であり、車が運転できない高齢者も移動ができる都市デザインも求められている。さらには、ヘルスケアに対するニーズも出てきている。これについては、社会的なつながりを強める必要があると感じている。というのは、彼らの子供たちは他の町に出て行ってしまっているのなので、サポートできるのはやはり近所の人たちとなってくるからである。また高齢者の方がコミュニティの中でいかに生きがいをもって生活することができるかということも必要。

・コミュニティベースの活動対し、市がどうサポートしていくかということも重要だと考えており、ポートランドでは、**Elders in action** という行政からの資金提供プログラムがあり、いかに高齢者がコミュニティでリーダーシップを発揮できるかや、高齢者が地域で生活するのに必要なスキルを身に着けるためのプログラムを行うための資金の提供を行っている。高齢者の方たちに資金を投資するというこのプログラムの目的は、彼らの知識や経験をコミュニティに還元してもらおうというものである。

Q. これまで、数日ポートランドに滞在して感じたところであるが、市全体としてまちづくりの主要な役や市民であり、すべての政策形成において、住民を起点とすべきであるというポリシーを市全体で持っておられるのではないかという気がしている。その点において、どのような想いで仕事をしているのかももう少しお聞かせいただきたい。

A. ・自分は、自分の仕事にオーナーシップを感じて仕事をしている。自分の地元のために仕事をするという気持ちが一番のモチベーションである。ポートランドに住んでいる人たちは、自分たちの住んでいる地域にプライドを持っているということは確かに言えると思う。たしかにポートランドは豊かで発展しつつある町ではあるが、それなりに課題も多く抱えているわけで、そういった課題に直面したとしても、プライドを持っていればコミュニティの人たちのために何かをやるという共通の原動力となるのではないかな。

また、市民にプライドを持ってもらうことが必要であるが、市がやっていることに対して不信感を抱かないようにすることが重要である。こんなことを言ってもどうせ行政は動かない、反応してくれないというシニカルな気持ちが市民の中に芽生えてしまえば、市民は参加をやめてしまう。それで、プライドを持っている人たちが、意味のある活動に参加して、そのプライドを維持できるようにするにはどうすればいいかということを考える必要がある。

・私は、ポートランドに生まれ育ったが、昔は、川は汚れていたし、大気は汚染されており、1970年代当時、ポートランドはそれほどよいところではなかった。しかしそれから40年たち、行政の政策、政治的なリーダーシップ、草の根のリーダーシップ、これら3つのコンビネーションによりまちの方向性が非常に大きく変わったと感じている。サステナビリティが重要だとする市民参加全体に関する全体の体系がないと、単に行政が政策として進めるだけでは物事はなりたないのではないかな。何らかの地元に対するプライドとアイデンティティが作り上げられて、物事が成り立つのではないかな。また、今日本が経験しているのは、世界にとって非常に重要な教訓となるものである。つまり20世



紀の従来的な考え方を変えなければいけない。今までは人口が増加し、それに伴う開発がされることというのが、日本のプライドにつながるという考え方であった。しかしこれからは、人口が減ることによって、逆に生活の質が上がるかもしれない、また人間関係を重視した生活の場を作ることができるかもしれない。そのように量から質へ重点が置かれていくということを日本が先頭になって示していくものになるかもしれない。

・若者が政治や行政に対しシニカルに見ており、なかなか参加しないということは、ポートランドも日本も同じかもしれない。若い人たちが、何か自分たちもやれば変えられるかもしれないという場を作っていくことが必要ではないか。

・私は、ポートランドの市民のプライドは、サステナビリティに対する理解なのではないかと感じている。この美しい環境をみんなで守っていかなければいけないのだという認識をみんなが持っている。ビジネスをやっている人も自分のビジネスの繁栄も重要だが、自分もコミュニティの一員として資源環境を保全していかなければいけないという認識を持っている。そういう認識がというのが市のプライドになっているのではないか。

・これまで30年ほどやってきた中で、頭で考えながら走っていくという感じである。行政マンとして仕事をするということもあるが、地元が好きでやっていると思う。地元が好きという気持ちを市民と共有しながら、成功事例を積み重ね、それがまた次の成功につながっているのだと思う。

・パネラーのみなさんに共通していることは、自分のまちに対する愛着心にプラスして、自分たちの町をよくしていきたいと思う自分の気持ちを信じている心があると思う。みなさんにとってこれから、自分たちが与えられたシステムの中で、できること、またできると信じるのが試練となってくるのではないか。市民を巻き込みながら、自分の組織の中の人たちを信じながらやっていくということが課題になるのではないか。

Q. 異動などで人が入れ替わることに備え、人材を次につなげていくために、こういった取組をしているか。

・市民参加を推奨するためのアプローチをより広げていかなければならないと考えている。というのは、従来はネイバーフットアソシエーションが市民参加の主たる手段であるというスタンスでアプローチしてきたが、ネイバーフットアソシエーションを活用しない人たちも出てきているからである。従来型の公聴会や都市計画のための住民説明会だけでなく、いろんな形の参加の方法を提供していかなければならないと考えている。たとえば、若い人たちは、そういう会合には参加しないけれど、一日だけのボランティアに参加して

みたいとか、コミュニティガーデンでの活動や、大工道具の貸し出しの活動など、いろんな形で自分が貢献できる場があるということで、そういう参加の場を提供していくことも必要だと感じている。

・ポートランドの東側の地区は、ポートランドの地価がどんどん上がってしまっていて、そこに住めなくなっている人が移り住んでいる地区であり、比較的低所得者の人が多く、人種的にもマイノリティの方が多くなっており、そういう人たちのニーズにもこたえる必要があるということで、都市計画とサステナビリティの部局が、約 250 の提案を集めて「東ポートランドアクションプラン」というものを作った。それでその提案を実行に移すために、どうやってその地区の人、特に英語を話さないような人たちもテーブルについて参加できるかについて今取り組んでいるところである。

・ここ数日研修生のみなさんとお話しをして、みなさんたとえば補助金のようなシステムはもっているけれども、なかなか地域の活動や市民活動に参加する人がいないとか、あるいはそういった助成金を使ってももらえないという課題を抱えておられるということがわかった。どうやったら人々がやる気をもって参加してもらえらるだろうかというのがみなさんの悩みなのだと感じた。オークグローブの経験から、プロジェクトが進むとあなたたちの地域は影響をうけるのだということを一人一人あたって説明していったという自分の経験から、そのように一人ひとりあたっていくということも必要だと思うし、人々を集めるということについては、人々は、ミーティングは嫌いだがパーティは好きなので、そのように飲み物を出したり、食事を出したりすることで、人々は楽しいと思ってやる気を出してもらえ、さらには人間関係もできており、それは次のプロジェクトにもつながる。みなさんも自分の仲間にできる人を集めていってほしい。

・私はこの仕事をしていきたいので、短期で心配はしていないが、PSU などを通じてさまざまな人とかかわっているので、自分の代わりになるような人はいると確信している。自分が心配しているのは、今自分と一緒に仕事をしている市役所の中の仲間がいなくなったときに、誰がその穴を埋めるのかということである。私よりも年上の方としているのでその人が退職したらどうなるかというのは心配である。こうした活動に人々が参加してもらえらるのは、何か問題があるときに単に主張するだけでなく、何か行動を起こすということが重要だと感じて言える。

・計画ではなく、実行に移すということに重きを置くことが大切なのではないか。人々は実際に物事をやるということに共感を覚えるので、プランニングではなく、人と時間を過ごすことを重視したらいいのではないかと思う。

・10年前に比べて、経験があって価値観を共有できる人は多くなってきているように感じる。リーダーシップをとれる人たちも増えてきていて、もちろんアプローチの仕方は違うけれども、そういった人材が貯蓄されてきているように思う。それで、自分の心配は別のことに向いているように感じた。

・昔はコミュニティのリーダーシップをとってきていた人は白人で裕福な人たちが多かったが、人種が多様化してきており、これから20年30年後を見越した時に、どういったひとがコミュニティのリーダーとなっていくべきか、ということについても考えていかなければならない。そういうマイノリティの人たちにもトレーニングプログラムを提供している。

《まとめ「どうやって耐性あるコミュニティをつくるか」》

耐性があるまちとは、①現状を維持することができる、②壊れたものを回復することができる、③学ぶことができる、④再構築することができる、この4つの要素を持つものがあるのが、耐性があるまちなんだと思う。これからもみなさんがこの4つをどうやったらできるのかについて、自分の仕事を通じて、またコミュニティや自分の家族の会話などを通じて考えていくことが大切なのではないかな。